

夫婦パスタ日記

第7話『思い出の鯛づくしパスタ』

第一稿

作・壽倉 雅

登場人物

広 田 勇（83） 元建設会社役員
広 田 節 子（76）（82） 勇の妻、専業主婦

広 田 浩 司（21） 勇と節子の一人息子（回想）
広 田（浜岡）真希（21） 浩司の妻（回想）

勇の釣り仲間

勇と節子の孫娘（当時3歳の回想）

1 広田家・全景

T『六年前』

瓦葺き屋根、タヌキの信楽焼、引き戸の玄関という昔ながらの日本家屋の造り。

セミの鳴き声が響き渡っている。

2 同・居間・縁側

縁側にぶら下がっている風鈴が小さく優しい音を奏でている。

その下で、甚平姿の広田勇（83）が、大きな銀縁の老眼鏡をかけ、あぐらをかいて黙々と何本もの釣り竿の手入れをしている。

勇（N）「私が、専務取締役まで勤め上げた建設会社を定年退職したのは、もう二十三年前の話。仕事一筋で生きてきた私にとって、当時から唯一の趣味だったのが釣りだった」

と、浴衣の上から割烹着を着た妻・節

子（76）が、洗濯かごを持ってやってくる。

節子「あら、また釣りに行かれるんですか？」

勇「道具つてのは、常に手入れしとかないとな。釣りに行かないからって、そのままにしていたら、せつかくの竿だってダメになっちゃう」

節子「そういうものなんですか。私にはそういうのは分かりませんからね」

と、物干し竿に掛けられている洗濯物を取り込み始める。

節子「次に釣りに行く予定はあるんですか？」

勇「（手入れをしながら）そうだな。多分、再来週かな」

節子「結局すぐ行くんじゃないですか」

勇「釣りは私の唯一の趣味なんだよ。君もな、いちいち亭主のすること気にするより、何か趣味でも見つけたら良いじゃねえか」

節子「趣味って言われてもねえ、専業主婦の私に今更何しろっておっしゃるんですか」

勇（N）「建設会社に勤めて十年ほど経ち、現場主任になった頃、当時の上司や先輩から『仕事に専念するには女房見つけないな』と言われて紹介されたのが七歳下の女房だった。結婚後、節子は専業主婦に徹し、一人っ子ではあったが息子にも恵まれた。長年主婦一筋で来年喜寿を迎える女房に、今更新しい趣味を見つけてもらうのは、やはり酷なことかもしれない」

勇「（手を止めて）おい、あいつ盆には帰って来るのか？」

節子「お盆は仕事休みだと言ってましたからね。さすがに帰ってくるんじゃないかもしれませんか」

勇「連絡しとけよ。仕事もして、一人暮らしがちゃんとできてるなら別に心配はしてねえけど、減多に帰ってくることないじゃないか。同じ市内に住んでるつてのによ」

節子「便りが無いのが何とかって言うじゃありませんか。今の時代、仕事があるだけで

もありがたいと思わなきゃ」

勇「盆なんだ。せめて両親の墓参りぐらい付き合うように言っとけよ」

節子「はいはい、分かりました」

タイトル——『夫婦パスタ日記』

第7 話『想い出の鯛づくしパスタ』

3 道（回想）

勇が、孫娘（当時3 歳）を抱っこして散歩をしている。

勇（N）「私にとって今の気がかりは、一人暮らしをしている孫娘のことであつた。定年退職をしてこれからは悠々自適に過ごそうと思っていたのだが、退職からわずか三年後、息子夫婦が突然の交通事故でこの世を去ってしまった。私は唯一残された当時三歳の孫娘を引き取り、妻と共に親代わりとして育て上げた」

4 広田家・居間（回想戻り）

新聞を読んでいる勇。

勇（N）「その孫娘も二十四歳になったのだが、未だに結婚の話題が出てこない。初婚の平均年齢が二十代後半になっているというのは、最近の新聞記事を見て把握をしていたが、やはりどうせ花嫁姿を見るのであれば、早いに越したことはないとは私は焦っていた」

と、節子が固定電話で話しているのが聞こえてくる。

節子「（電話に）あらそう。何も連絡ないから、今年のお盆は帰ってこないんじゃないかと思って心配してたのよ。（と勇を見ながら）おじいちゃんもね、たまにしか孫娘に会えないからヤキモキしてるのよ」

勇「うるさいな。（と立ち上がって受話器を奪うと）もしもし、じいちゃんだ。あのな、仕事も良いが、結婚のほうはどうなんだよ」
節子「ちよっとお父さん」

勇「（電話に）じいちゃんもばあちゃんもな、それが気がかかりなんだよ。いや、仕事が忙しいって、そんな理由になるか。あのなあ……（と電話が切れており）あれ、もしもし？　もしもし？　（と受話器を戻して）切りやがった」

節子「あまりお父さんがそうやってうるさくおっしゃるから」

勇「母さんだって、気にしてたじゃないか」

節子「だからって何も電話で聞くことないじゃないですか。（とブツブツ言いながら）せつかくもう少し話せると思ったのに」

勇「盆に帰ってくるんだ、その時ゆつくり話せば良いだろ」

呆れ顔の節子。

5 同・夫婦の部屋

節子が、鴨居の上に飾られていた息子・浩司とその妻・真希の遺影を眺めている。

節子（N）「私にとって、浩司は自慢の息子でした。夫と結婚後に、なかなか子どもに恵まれず、ようやく一人息子を出産できたのは、私が三十二歳の時。二人目は諦め、とにかく息子を生きがいにして、専業主婦として家事と子育てに専念してきました。だからこそ夫も仕事に従事することができ、息子が小学生の頃には勤め先の取締役就任し、定年の時は専務取締役になっていました。息子も仕事ができる夫のDNAを継いだのか、小学校では学級代表、中学校では所属していたバレーボール部のキャプテン、高校では生徒会長を務めました。そして、受験勉強の末、都内の大学に無事に合格してくれたので、これから大学生活を謳歌してほしいと願っていました。しかし、息子は大学三年生になって間もなく、同級生という女子学生を家に連れてきました。ちやうど夫が定年を迎える年のことでした」

6 同・居間（回想）

勇、節子、浩司（当時21）、真希（当時21）が向かい合うように座っている。

勇「そちらのお嬢さんは？」

浩司「大学の同級生の、浜岡真希さん」

真希「浜岡真希と申します」

節子「（察して）浩司、あんたまさか……」

浩司「俺、この子と結婚する」

勇「ちよつと待て。お前、まだ大学生じゃないか。どういう見だ」

節子「何も今じゃなくても、お互いに仕事を
して、経済的にも余裕ができてからで良い
じゃない。あんたまだ、大学三年生なんだ
から」

浩司「今じゃなきゃ、ダメなんだよ……」

節子「どういうことよ？」

浩司、真希の腹部をじつと見つめる。

節子「（察して）浩司……」

勇、浩司を殴り飛ばして、

勇「何て奴だ、お前は！」

浩司「……」

節子「……」

勇「こちら様のご両親に何てお詫びしたら良いんだ。まだ嫁入り前だってのに」

浩司「だから結婚するって言ってるだろ」

節子「そういう問題じゃないでしょ。物事には順序ってものがあるんだから」

勇と浩司が、険しい顔で睨み合っている。

節子（N）「それから間もなく、二人は大学を辞めて入籍をし、都内で新婚生活を始めました。相手方の両親は結婚と妊娠の事実に激高して実の娘に絶縁宣言をし、こちらも絶縁とまでは言わないものの連絡を取ることはなくなり、疎遠になっていました。それでも、ちゃんと生活できているのか、様子でも見に行こうかと、私は何度思ったか知れません」

7 同・夫婦の部屋（回想戻り）

息子夫婦の遺影を見つめている節子。

節子（N）「しかし、息子と疎遠になって、わずか三年。孫娘を残して、息子と嫁は呆気なくこの世を去ってしまいました。子育てをもう一度する気持ちで引き取った孫娘は、亡き両親とは正反対で、結婚どころか交際相手すらいません。私にとっては、逆にそれが焦りとなっていました」

8 海上の小型船（二週間後）

勇や数人の釣り仲間たちが、釣り竿の糸を垂らして、しばらくそのまま待機している。

勇、糸が引く瞬間を捉えるまで、一点集中で海の様子を眺めている――やがて、糸の動きが変わる。

勇「よし、来た！」

と、冷静になってリールをひたすら回していく――勢いよく竿を上げると、

針に引っかった小ぶりの真鯛がピチ

ピチと跳ねている。

釣り仲間 A 「勇さん、今日も絶好調ですね」

釣り仲間 B 「さすがですねえ」

勇、要領よく釣れた鯛から釣り針を外して、クーラーボックスの中に入れていく――既に中には、真鯛が二匹、シマアジが二匹入っている。

勇「これぐらい釣れたら、女房にも良い顔できるだろ。釣れなかったら、何のために行つたんだって、面白くない顔するからな」

釣り仲間 A 「無事に目的は達成できましたね」

勇「釣れないと露骨に嫌な顔するし、今日みたいなたくさん釣れた時は嬉しそうな顔するんだよ。単純だよ、全く」

釣り仲間 B 「また家で捌いて、奥さんに食べさすんですか？」

勇「刺身か煮魚が定番だが、たまにはパスタも良いだろうな」

釣り仲間 B 「パスタ？　勇さん、パスタ作る

んですか？」

勇「鯛って、出汁が出るだろ。吸い物にするのも良いんだが、毎回刺身や煮魚や吸い物にしてたら、女房が飽きたような顔しやがってな。他に何かないかなと思って、私なりに頭の中で考えてたら、鯛で出汁取ったパスタも良いんじゃないかって思ってな」

釣り仲間 A「勇さん、料理人にでもなれたんじゃないですか？」

勇「（苦笑して）まあ、そういう人生もあったかもしれないな」

勇（N）「内心、定年退職後に第二の人生として料理に携わる仕事をしてても良いと考えた時期もあった。だが思いがけず息子夫婦が亡くなり、残された孫娘を育てるためにその夢を諦めた。退職金や貯金、年金を切り崩すだけではいけないと思い、女房共々シルバー人材センターに登録して、ささやかではあるが孫娘の養育費の足しにもしたことがあった。人生とは思いつ通りにいかな

いものであることを、還暦を越えてからも
私は思い知らされてた」

9 渡船場

勇が携帯電話を取り出して、電話をかける。

10 広田家・居間

固定電話が鳴る——節子が入ってきて、
受話器を取ると、

節子「はい、広田です」

と、電話から勇の声がする。

勇の声「ああ、私だ。今から帰るぞ」

節子「魚は釣れましたか？」

11 渡船場

携帯電話で話している勇。

勇「真鯛が三匹、シマアジが二匹だ。鯛は、
刺身、煮魚、パスタにそれぞれするぞ。パ
スタ、まだ余ってたか？」

12 広田家・居間

電話をしている節子。

節子「ああ、ちょっと待ってくださいね」

と、保留ボタンを押して、台所へ向かうと、パスタの容器に麺が入っているのを確認する。

節子、もう一度電話に出て、

節子「ええ、まだ余ってますよ」

勇の声「分かった。パスタに使う材料買ってから、家に戻る」

節子「はいはい、お気をつけて（と電話を切る）」

13 渡船場

勇、携帯電話を片付けて、クーラーボックスを抱えながら歩いていく。

14 広田家・全景（夕）

15 同・居間

勇が、クーラーボックスを開ける――
傍らに節子。

勇「（鯛を一尾掲げて）どうだ、良い鯛だろ」
節子「おつきいですねえ」

勇「今日の夕飯は、これでパスタ作るぞ」

節子「楽しみにしてますよ」

× × ×

以下、調理工程をカットバックで。

勇、真鯛を一尾、分厚い木のまな板の上に乗せると、ウロコ取り器でウロコを取り除く。

勇（M）「まずは鯛のウロコを丁寧に取り除く」

× × ×

出刃包丁を取り出して、鯛の脇ビレの部分に包丁を入れ、その後頭部を切り落とし、内臓を取り除く。

勇（M）「鯛の脇ビレ部分に包丁を斜めに入
れ、包丁の峰を使って、頭部を切り落して、

内臓も丁寧に取り除いていく。この何とも
言えない生臭さは、決して苦ではなく、魚
を捌く私にとって、むしろ気合いが入る瞬
間でもあった」

× × ×

イメージ——まな板の上に並んでいる
出刃包丁と刺身包丁。

勇（M）「『魚を切るだけなら、普通の包丁
で良いではないか』と、その昔女房に苦い
顔をして言われたことがあった。私は料理
人ではないし、あくまで趣味の一環ではあ
るが、どうせ魚を捌くなら良い包丁を使
いたいと、魚用に出刃包丁と刺身包丁は包丁
専門店まで足を運んで購入をした」

× × ×

鯛を三枚おろしにしている勇。

勇（M）「この包丁購入が原因で、財布を握
っていた女房からは、月の小遣いを減らさ
れた時期もあった」

× × ×

ボウルの中に入っている、鯛のあら―

―それを水道の水で洗う勇。

勇（M）「三枚おろしの過程で余った、頭部、カマ、中骨、ヒレなどの、俗に言う『あら』の部分、醤油や酒、みりんで煮込んだ『鯛のあら煮』にしたこともあった。今回は出汁を取るために、ボウルに入れて水で綺麗にする」

× × ×

刺身包丁で、鯛の身を切る勇。

勇（M）「三枚おろしの際に、魚の身を縦長四分の一にカットした状態のことを、『四半身（しはんみ）』と言う。私は『四分一（しぶいち）』と呼ぶが、これらは女房や孫には通じない言わば専門用語であることを、私は後から知った。鯛の身は、刺身と同じ要領で切っていくが、刺身の時よりも少し厚めに切る。これだけでも良い酒の肴になるだろう」

× × ×

鍋に鯛のあら、水、塩を入れる勇。

勇（M）「大きい鍋に、一尾分の鯛のあらと、水二リットル、塩ひとつまみを入れて、三十分間中火でじつくりと煮出していく。途中で、何度かアク取りをしながら」

× × ×

三十分後——鍋の火を止める勇。

そのまま、キッチンペーパーをのせたざるに移し替えて、こす。

勇（M）「三十分経ったら、ざるにこしていく。鯛のあらによつて、真つ白な出汁が完成した」

× × ×

小さな昆布をボウルに入れる勇。

勇（M）「出汁を入れたボウルに、五センチ程度に切った昆布を浸け、そのまま置いておく」

× × ×

大葉を細かくみじん切りにする勇。

勇（M）「大葉は十枚、茎の部分を取り、葉

つぱの部分細かくみじん切りにしていく」

× × ×

コンロの上にフライパンを乗せる勇――
出汁をその中に注ぎ、火にかける。

勇（M）「フライパンに先ほどの出汁を入れて、
中火で熱する」

× × ×

フライパンの出汁が沸騰している――
そこにパスタを入れる勇。

勇（M）「数分経って沸騰すると、そこにパスタ二百グラムを入れる。『七分茹で』とパッケージには記載があったので、プラス二分、九分間、煮込んでいく」

× × ×

九分後――菜箸を使って、パスタの麺を一本口にする勇が、大きく頷く。

勇（M）「九分経つと、パスタはちょうど良い硬さになっている」

× × ×

フライパンに、鯛の切り身、大葉、刺

身醤油を入れて混ぜる勇。

勇（M）「そこに、鯛の切り身、みじん切りにした大葉、そして刺身醤油大さじ一杯を入れて、全体を混ぜ合わせる」

× × ×

皿にパスタを盛り付ける勇。

勇（M）「鯛の切り身には、余熱で火が通り、しっかりとした白色に変わっている。これで『鯛づくしパスタ』の完成である」

16 完成した『鯛づくしパスタ』

17 広田家・居間

卓袱台にパスタを運んでくる勇。

勇（N）「このパスタは、家族には幾度となく作ってきた、私の名物料理の一つだった。基本的に食事の支度は女房に任せているが、魚料理は別である。これまで家族に食べさせるために、いろいろな魚料理を作ってきたが、唯一、勇の魚料理を食べたことがな

かったのは、息子の嫁だけだ。結婚に反対し疎遠になった後、息子夫婦が事故死するまで、結局そのわだかまりが消えることがなく、正直私はそれをずっと後悔していた。息子ともう築くことができなかった親子としての時間を、私は女房と共に、孫娘を育てることで何とかその代わりにしようとした。お盆の時に帰ってきた孫娘は、どこもなく息子にも嫁にも雰囲気が似ている。就職をして家を出ていつてからは、すっかり私の魚料理を食べさせることもなくなってしまうが、ふと一人暮らしではなく、また三人で暮らしても良いと私は思っていた」

勇、廊下に向かって、

勇「節子、 Pastaできたぞ」

節子が戻ってきて、

節子「できましたか」

勇「食うぞ」

節子「はい、じゃあいただきますしうか」

卓袱台を囲んで座る勇と節子。

勇・節子「いただきます」

と、それぞれ箸でパスタを食べ始める。

節子「やっぱり美味しいですね、あなたが作るパスタは」

勇「具材が良いんだよ。釣り堀で釣ってきた
とはいえ、鮮度は良いからな」

節子「鯛、あの子に食べさせたいですね」

勇「そうだな。この間あいつが帰ってきた時は、近所で釣った川魚の料理だったからな」

節子「あの子も、もう少しゆつくりしたら良かったのに。それに、近くに住んでるんですもの、何もわざわざ一人暮らしなんかしなくたって……家賃が勿体ないですよ」

勇「何だ、母さんもそう思ってたのか？」

節子「え？」

勇「また三人で暮らせたらなって、私もちよつと考えてたんだ」

節子「そりやそう思いますよ」

勇「まあ、俺たち年寄りの生活に合わせたくないんだろうな。どうしたって、俺たちは

孫相手になったら過保護になる。いくら、ちゃんと仕事として一人前になってるって言っても、俺たちにとっては子ども同然に育ててきた孫だからな」

節子「そうですね。仕事で遅くなったりしたら、私たちも待ってないといけませんし」

勇「盆に帰ってきた時には上手くはぐらかされたが、あいつも、もう身を固めても良いだろうに」

節子「今度、様子見てきましようか？」

勇「そうだな。確かあいつ、火曜日が休みって言ってたな。魚冷凍して、火曜日に持つてけるように支度でもするか」

節子「煮魚のほうが良いですね。この時期だと、刺身は腐りやすいと思いますし」

勇「あらかじめ、連絡したほうが良いかもしれないな。休みだからって、家にいるとは限らんだろ」

節子「後で連絡しておきます」

勇「ああ、頼むよ」

節子「あなた、またパスタ作ってくださいね」

勇「どうしたんだ、急に」

節子「別に、何でもありませんよ」

勇「そっか」

×

×

×

節子が固定電話で話している。

節子「そうなのよ。おじいちゃんがね、また
鯛を釣ってきて。そう、おばあちゃんたちはね、
今晚パスタで食べたのよ。そうそう、あんたも好きな、
鯛で出汁取ったやつ。じやあ、火曜日お昼過ぎには行くからね。
はい、じゃあまた火曜日に（と電話を切る）」

と、風呂上がりの勇が入ってくる。

勇「あいつ、火曜日いるって？」

節子「ええ。ちょうど何も予定がないから、
ずっと家にいるそうです。お昼過ぎには行く
と伝えてあります」

勇「じゃあ、朝から支度するか」

節子「お願いします」

勇「あいつに聞いていてくれ。結婚のこと」

節子「そうですね」

勇「あれぐらいの歳になったら、仕事が休みの日だと、そういう相手と会うのが普通だ
と思うんだな」

節子「（苦笑して）何言ってるんですか、相手がいたらいたで、いろいろ気になるでしょう」

勇「学生時代だったらそう思うかもしれないが、あいつだってもう立派な社会人だ。逆に相手がいない方が不安になるだろう」

節子「浩司の時は、そんな余裕もなかったですしね」

勇「あいつらは早すぎたんだ。まだ大学生の分際で、結婚だの妊娠だの入籍だの……」

節子「けど、浩司たちが結婚して、真希さんが出産していなければ、私たちは孫の顔すら見れなかったかもしれないですよ」

勇「忘れ形見だからな、ある意味では……」

節子「浩司たちが亡くなった時、真希さんの
ご両親はお葬式に出席するどころか、香典
を送ってくることもお花を送ってくること
もありませんでしたもんね」

勇「真希さんのご家族は、浩司との結婚を許
さず、そのまま絶縁状態だったからな。娘
が亡くなっても何とも思わず、残された孫
のことを気にしようともせず、白状な人た
ちだったよな」

節子「私たちが引き取って、良かったと思っ
てますよ」

勇「それは、私も同意見だ」

節子「両親がいない分、あの子にはもつと幸
せになつてもらいたいものですね」

勇「お見合いでもさせるか？」

節子「それも、一つの方法かもしれませんがね」

勇「どうも私たちは、孫のことになるとあれ
これと勝手に暴走してしまうな」

節子「そうですね」

苦笑し合う勇と節子。

節子（N）「この日食べたパスタが、私にとって最後の機会になるとは、この時は思ってもいませんでした」

18 同・全景（数日後）

19 同・居間

台所で倒れている勇。

節子（N）「週明けの火曜日。孫に持っていたために、鯛の煮つけを作っている最中、夫は突然の心筋梗塞を発症してしまったのです」

20 病院・手術室前の廊下

ソファーに座って、じっと待っている
節子。

節子（N）「救急車で病院に搬送をされた時は、もう手の施しようがない状態でした。それでも担当の先生は、最後まで夫の蘇生に尽くしてくれたそうです。息子夫婦に続

いて、夫も突然この世を去ってしまい、私は心の整理がつきませんでした。通夜と告別式の準備や対応に追われ、ゆっくりと夫との別れもできませんでした」

21 同・夫婦の部屋（数日後・夜）

祭壇が作られており、勇の遺影と骨壺が置かれている――その前に、小さくじっと座ったままの節子。

節子（N）「初七日の日に、私はようやく、八十三年という人生に突然幕を閉じた夫は幸せだったのだろうかと考えました。建設会社に定年まで勤め上げ、専務取締役になるまで様々な苦労があったのは察しがつきます。ようやく退職をしたと思えば、今度は息子の思いがけない結婚、そして事故死」

節子、大きな溜息をつき、その場に泣き崩れる。

節子（N）「夫、息子、その嫁を失い、私に残されたのは、息子の忘れ形見である可愛

い孫娘一人だけになりました。私も七十六になり、『人生百年時代』という言葉が顕著になってはいるものの、人間明日のことは分かりません。もしかしたら今晚眠ったまま、夫の元に旅立つ可能性もあります。一人残された自分には、孤独死が待っているとさえ考えるようになっていました」

22 同・居間

在りし日の勇の姿——台所に立って、
魚を捌いている。

23 同・全景

T 『現在』

24 同・夫婦の部屋

鴨居に掛けられている三枚の遺影——
浩司、真希、そして勇。

その勇の写真をじっと見ている節子。
節子（N） 「あれから六年の歳月が流れまし

た。この六年、悲壮感を抱き、精神的に悩むことは何度もありましたが、時間が解決してくれました。今日は、夫の七回忌です。私は病も患うことなく、今に至っています。夫の親戚はほとんどが故人になっており、付き合いもないことから、表向きは自身の高齢を理由に、七回忌の法要は行わないことにしました」

と、玄関のチャイムが鳴る。

節子「お父さん、唯が来てくれましたよ」

と、出ていく。

節子の声「唯、いらっしやい」

つづく